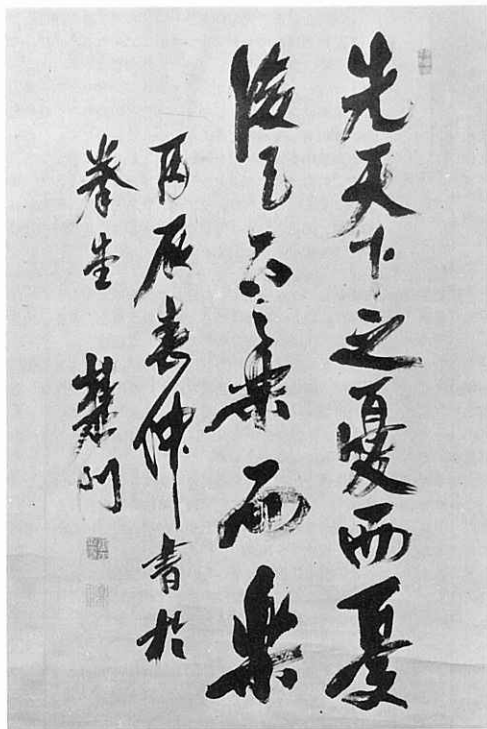




博物館報

No. 14



鍋島直正の書 (171cm×99cm)

鍋島直正は、佐賀10代藩主で、文化11年11月江戸藩邸に生まれ、幼名を貞丸、長じて斉正、直正と称した。天保元年襲封、窮乏した財政の再建のため殖産興業に力を注ぎ、他藩に先んじて藩政の改革を断行するとともに、長崎警備に力を入れ、鑄砲建艦に努めて軍備の近代化をはかった。また、人材の養成のため藩校弘道館の大拡張をはかり、蘭学を取り入れ、種痘を実施し、高島炭鉱の洋式機械の導入など積極的に開明の施策を実施し、幕末の諸侯の中でも名君のほまれが高かった。明治政府では上院議長、議定、蝦夷开拓督務などを歴任、のち大納言に任ぜられ、明治4年58才で病没した。

鍋島直正の卓絶した識見と学問は、侍講の古賀穀堂、井内南涯、永山二水の影響が大きいといわれるが、詩作や書にも長じていた。茶雨、拳堂、惺菴、紫水、閑叟などと号し、書は、はじめ男谷燕斎を、のち米元章を学んだと伝えられるが、筆勢が強く、気宇壮大なものがある。

この書は、安政3年43才の時のもので、時勢は国の内外ともに緊迫しており、佐賀藩が幕府に納めた大砲を備えた品川台場や長崎砲台の巡検に走りまわっていた年である。なお、この書の語句は、范文正公の岳陽樓記の中の「居廟堂之高、則憂其民、處江湖之遠、則憂其君。是進亦憂、退亦憂、然則何時樂耶、其必曰先天下之憂而憂、後天下之樂而樂歟」からとったもので、その人柄と政治姿勢を知るうえからも貴重な資料の一つである。

目次

鍋島直正の書	1
野島展の紹介・佐賀の野島の目録	2・3
白蛇山岩陰遺跡の第2次発掘調査	4・5
第10回研究講座	6
新資料紹介	7
博物館日誌・行事お知らせ	8

野鳥展のおしらせ



水田のホオアカ (1973.1.500^{1/2}・トライク)

佐賀県の野鳥目録 (48. 3. 20現在)

はじめに

佐賀における野鳥研究の歴史は古い。佐賀女子師範学校に勤務したことのある川口孫治郎氏は、「日本生態学資料」(昭和12. 2. 5刊・菓林書房)の中に、県内の事例を明治30年代から、昭和初期にかけて、いろいろと記載されている。また、生態写真のうまい下村兼史氏(東松浦郡相知町の出身)も、日本の野鳥研究者として忘れてならない人である。

カササギの研究は、名古屋大学教授弥富貴三氏が、天然記念物に指定された大正12年と、昭和6年に調査された記録があり、戦前から研究をつづけられていた谷口一夫氏(前島栖高校長)、さらに戦後、久保浩洋氏(佐賀大学助教授)によってうけつがれ、北部九州におけるカササギの生態と、生息の実態があきらかにされつつある現状である。谷口氏はまた、昭25. 8. 2、神埼高校生が持参した、神埼郡千代田町、城原川堤防からみつけた巣

野鳥展

○会期、昭和48年5月10日から、6月5日まで(月曜休み)

○会場、佐賀県立博物館大展示室

○開催趣旨と展示内容

全国的な愛鳥週間の行事の一環として、毎年開催している。伊万里市のマナヅル、北山ダムのコブハクチョウをはじめ、当館が所有している野鳥剥製標本約100点、コゲラ、ハシブトガラス、ホオジロ、カササギの古巣およびホオジロ、オオヨシキリの卵などの資料と、音成三男、福田司、牧瀬馨の各氏が苦心して撮影していただいた野鳥生態写真約30枚を剥製標本と組合せて展示する。また、県鳥カササギを巣と剥製標本と背景パネルで、特で紹介することにした。その他、野鳥の解説、野鳥保護の趣旨、巣箱のつくり方などのパネル、野鳥保護のためのパネル展示する予定である。

と卵から「ツルクイナ」が日本でも繁殖することを、はじめて確認した研究家で、この資料は現在、東京、渋谷、南平台、山階鳥類研究所に保管されている。

戦前から戦後にかけて、佐賀師範学校から佐賀大学にかけて、博物学一般を教授されていた関谷国英氏は、野鳥の生態にはとくに詳しく、現在佐大教育学部に保管してあるオオワシの剥製標本は、同氏によるもので、県内飛来の貴重なものである。

倉成栄吉氏は久留米市明善中学校在学中、川口氏の教化をうけたであろうか、戦後、基山町野鳥目録をまとめ、「九州野鳥の会」の幹事として活躍されていたが、昭和41年1月急死された。

この目録は佐賀野鳥の会の有志が、これら先人の記録と、新たに確認した資料をもとに、昭和47年12月以来3回の研究と討議を経てまとめたものである。

目録

アビ科

△アビ、旅鳥、北部海上、松浦川口

オオハム、冬鳥、北部海上、松浦川口、S.48.3.4

+シロエリオオハム、旅鳥、S.41.5.1馬渡島

カイツブリ科

カイツブリ、留鳥、各地の水辺

△ハジロカイツブリ、冬鳥、松浦川口、呼子、唐津湾

+アカエリカイツブリ、冬鳥、唐津湾

△カムリカイツブリ、冬鳥、有明海、北部海上、北山ダム

ミズナギドリ科

オオミズナギドリ、留鳥、北部海上

+アカアシミズナギドリ、旅鳥、S.39.1.10伊万里 七ツ釜

ウミツバメ科

ヒメクロウミツバメ、留鳥、北部海上

カツオドリ科

+カツオドリ、旅鳥、S.41.5.1 馬渡島

ウ科

ウミウ、冬鳥、北部海上

△ヒメウ、冬鳥、北部海上

ゲンカンドリ科

+コゲンカンドリ、旅島、七ツ釜

サギ科

+サンカノゴイ、旅島、S.42.11.20 久保田

ヨシゴイ、夏島、有明干拓

△ミゾゴイ、夏島、背振山、祐徳院

ゴイスギ、留島、県下水辺

ササゴイ、夏島、有明干拓

+アカガシラサギ、旅島

アマサギ、夏島、有明海、麻津

ダイサギ、夏島、有明干拓

(チュウダイサギ)、夏島、有明海

チュウサギ、夏島、有明海

コサギ、留島、有明海

クロサギ、留島、北部海辺

アオサギ、留島、有明海

+ムラサキサギ、旅島、S.42.4.22馬渡島

トキ科

△ヘラサギ、冬島、浜、有明海

+クロツラヘラサギ、冬島、有明海、浜

ガンカモ科

+マガン、冬島、有明海、住の江

+ヒシクイ、冬島、S.32.1 有明海、川副、北山ダム

+オオハクチョウ、旅島、S.10 伊万里

S.42.1.4 北山ダム

+コハクチョウ、旅島、S.34.12月 伊万里

S.34.11.13 多久)

+アカツクシガモ、旅島S.42.1.1 43.1.1 44.2.5

いずれも北山ダム

△ツクシガモ、冬島、西川副干拓、浜、川副、塩田川口など

オシドリ、冬島、北山ダム

マガモ、冬島、各地の水辺

カルガモ、留島、各地の水辺

コガモ、冬島、北山ダム、川副

トモエガモ、冬島、有明海

ヨシガモ、川副、北山ダム

△オカヨシガモ、冬島、有明海、北山ダム

ヒドリガモ、冬島、浜、川副

オナガガモ、冬島、北山ダム、浜、有明海

△シマアジ、冬島、S.41.4.10 塩田川口

ハシビロガモ、冬島、有明海

ホシハジロ、冬島、有明海、北山ダム、松浦川口

キンクロハジロ、冬島、多良海岸

スズガモ、冬島、松浦川口

+クロガモ、冬島、大浦

+ビロウドキンクロ、冬島、大浦

ホオジロガモ、冬島、北山ダム、浜、松浦川口

ミコアイサ、冬島、川副、北山ダム

ウミアイサ、冬島、大浦、北部海上、北山ダム

+カワアイサ、冬島、松浦川口

ワシタカ科

ミサゴ、留島、浜、川副

ハチクマ、旅島、馬渡島、北部海岸

トビ、留島、各地

+オジロワシ、旅島、伊万里

+オオワシ、旅島、S.6. 川副、犬井道、S.8. 北川副

△オオタカ、冬島、山地

ツミ、旅島、山地や平地

ハイトカ、冬島、山地

ノスリ、冬島、川副、久富

サシバ、夏島、山地

+イヌワシ、旅島、有明海

チュウヒ、冬島、有明干拓

ハヤブサ科

ハヤブサ、冬島、海岸近くの平地

△コチョウゲンボウ、旅島、広い農耕地

チョウゲンボウ、冬島、海岸近くの広い農耕地

キジ科

ウズラ、冬島、有明干拓、草地

コジュケイ、留島、各地

ヤマドリ、留島、各地

キジ、留島、各地

ツル科

+ナベヅル、旅島、昭和初大詫間、伊万里、S.46.2 山代

マナヅル、旅島、S.44.1.16 西与賀

S.46.2.12伊万里

S.46.12/28~S.47.2/16鳥栖、高田

クイナ科

△フユクイナ、冬島、有明干拓

△ヒメクイナ、旅島、有明干拓

ヒクイナ、夏島、塩田川口、唐津・鏡

+シマクイナ、旅島、北山ダム

バン、夏島、有明、唐津

+ツルクイナ、夏島、S.25.8.2. 城原川で採卵

オオバン、冬島、平野のクリーク

タマシギ科

タマシギ、夏島、冬島、漂島、佐賀平野、唐津

(以下 次号へつづく)

白蛇山岩陰遺跡

第2次発掘調査概要

当館では、昭和45年の開館以来、「佐賀県における先土器時代から縄文時代の編年の確立」という問題と取り組み、伊万里市東山代町脇野所在の白蛇山岩陰遺跡の発掘調査を行ってきた。

発掘調査は、昭和46年7月の第1次発掘調査に引き続いて、第2次発掘調査を今年2月23日～3月5日までの11日間、伊万里市教育委員会と共催で、伊万里市郷土史研究会・東山代町脇野地区民の協力のもとに実施した。さらにこの調査期間中、遺物整理の夜間作業には地元の文化財保存に力を入れている脇野地区青年団の協力を受けることができた。

第2次発掘調査は、第1次調査時に設定した薬師堂の北側のAトレンチの完掘と、層位と遺物の確認、出土地点の明確な位置・レベルの記録作製を調査の目的とし、さらに上部岩陰より下部に位置する洞穴（下洞）に1m×1mの試掘溝を設け、遺物の有無の確認をもおこなった。

Aトレンチの調査の結果13層までの層位が確認された。1層が表土層で、2層から9層までが縄文時代の層であり、縄文時代晩期の磨消縄文土器から始まり、9層にいたっては押型文土器を主体とし、9層下部では爪形文・陰帯文・貝殻圧痕文土器が出土した。石器は、黒曜石製のものが大部分で、安山岩製のもの若干のほかは他の石質の石器は希であった。10層が無遺物層で、当遺跡において最大の落石があり、縄文時代と次の先土器時代とを明確に分離している。

11層から13層までが先土器時代の層で、円錐形のマイ

クロ・コア（細石核）と、これに伴うマイクロ・ブレイド（細石刃）を主に出土する。

このように当遺跡では、縄文時代の晩期から先土器時代までの文化層が一環して確認され、佐賀県における先土器時代から縄文時代の編年の確立を求めるうえにおいて、ひとつの手がかりになると思われる。

さらに下部洞穴では縄文時代の石核・剥片等が発見され、今後の発掘調査が期待される。

なお、この遺跡の調査報告書を今年度中に発行する予定である。

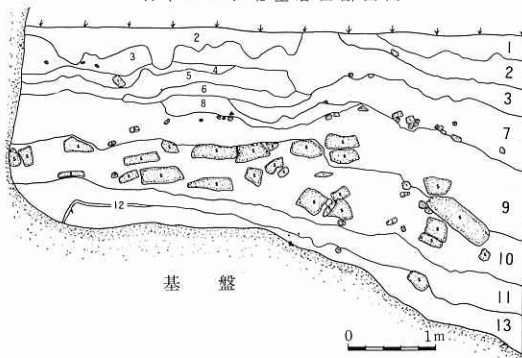


遺跡の所在地



地元小学生の見学

Aトレンチ北壁層位断面図



基盤

0 1m



最深層の調査

白蛇山岩陰遺跡出土主要遺物



▲縄文時代早期の各種土器片



▲縄文時代前・中期の各種土器片



▲縄文時代後・晩期の各種土器片



▲磨製石斧片



▲石匙片



▲石槍片



▲剥片鐵片



▲と石片



▲石錐片



▲サヌカイト製磨製鐵片



▲打製石鐵片



▲マイクロ・コア（細石核）片

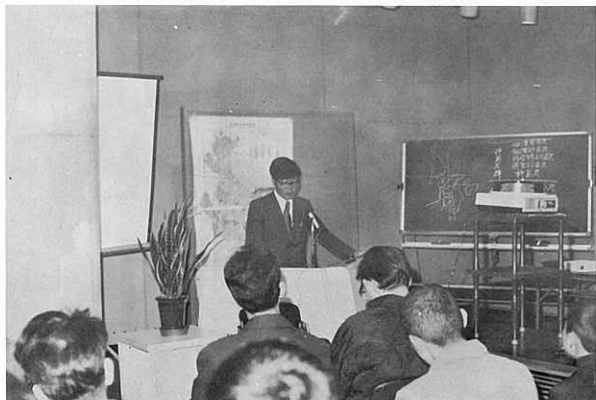


▲マイクロ・ブレイド（細石刃）片

第10回研究講座

佐賀の化石

講師 佐賀大学教育学部 西田民雄氏

昭和48年2月24日博物館中展示室
での講演内容の要約

研究講座風景

過去の生物が残した化石とは、一般に硬い部分が残され、変形、変質をうけていないということが常識的にいえることであるが、軟い部分や巣穴なども「こん跡化石」として残っている。この他、過去の時代の地球の極極を知る種化石、上場台地などに分布する玄武岩の中に強磁性の物質があって、当時の地球の極地性を知ることができる。

地球ができて40億年、45億年というが暫くして最初の生命が誕生した。その生命が今日までつづいている。その変化は進化学によって説明され、化石はその年代の測定に利用されている。地下埋蔵物である石炭、石油や七輪などに使われた珪そう、海鳥排泄物の堆積した燐鉱石も、他の生物の排泄物とともに化石ということができる。

佐賀県は国鉄唐津線を境界にして、東北部は花こう岩類とその南縁に古生層の三群変成岩によってつづられ、唐津線より南に、杵島層群、相知層群を主体とする第三紀層があり、炭層があって唐津炭田と呼んでいる。伊万里の近くでは第三紀層では新しいものに属する佐世保層群がある。多良岳、有田、伊万里では第三紀層を貫いて火山岩類が噴出している。一般に第三紀層のくぼんだ処から火山岩が吹き出ている。佐賀県の一部から石灰岩が出るが、変成作用がすすみ化石は産出しない。晶質化しているので化石としてある筈のフズリナなどもみられない。

第三紀における北部九州の古地理図では、古不知火海があり、その時代によって淡水、海水、海深などの海況

などは異なる。現在博物館に展示しているヨコヤマオウムガイは、東松浦郡北波多村稗田の行合野砂岩層から産したもので、全国的に完全な形と、大きさの点から注目される資料であるが、古不知火海の流れにより漂着したということにより、そこに生息していたということが考えられる。それだけに当時は暖い気候であった。このことと同じことであるが北海道狩野川田からも暖い地方にしか現在は産しない化石が出てくるということである。

杵島層には「有田化石帯」というカイ化石を伴う地層があり、植物化石、花粉化石と対比して漸新世の地層だといわれる。当時の古不知火海は汽水性の水で、海深1000米以下であったといわれている。

化石の研究は、化石の産出地点、そしてその地層の同定、化石の産出した砂岩の粒度、泥岩の状態や、生痕化石である花粉分析などは、現在の植物の花粉と比較しながら研究していくことが必要である。カーボン14による測定方法は、古い時代のものには適用されにくい、新しい時代の気候の変化などは知る事が出来る。

また化石研究の一つの方法として「生きた化石」の研究がある。化石は、ごく限られた部分しか残っていない。従って生きていた頃の生理、生態を知るうに極めて必要なことである。化石生物には、古生代カンブリア紀、約5億年前に住んでいたリングュレラが、有明海に住むシャミセンガイの祖先であって、軟体の多いこの腕足類を研究することによって、リングュレラの生活史を明らかにすることができる。同じように伊万里湾で繁殖するカプトガニの生活史をみると孵化直後の幼生は直径5ミリ位の大きさである。これが、古生代の海に栄えた三葉虫に極めてよく似ている。カプトガニはカニ類よりもむしろクモ類によく似ている。このほかトンボの仲間のムカシトンボや、裸子植物で精細胞が精虫となるイチノウ、ソテツなどの生活史の研究もまた古地理研究につながるものである。

(文責・手塚静雄)

田原輝作

「寂光」「白杵の仏」

田原輝作



「寂光」 油彩 F100

田原輝氏は、明治30年佐賀郡川副町の出身で、大正11年東京高等師範学校卒業後、洋画家として帝展、文展、日展等に出品、現在も日展の重鎮として活躍中である。また、なかく東京教育大学で教鞭をとり、美術教育界への功績も多大である。

氏の画歴としては、大正10年太平洋美術展初入選、大正15年第7回帝展に初入選後、引き続いて同展に入選するほか昭和5年には太平洋画会々員となったが、同23年同会を退き、示現会創設に参加(43年退会)その後主に日展に出品活躍している。その間、昭和28年第9回日展に出品した「呼」で特選朝倉賞を受け、さらに昭和30年第11回日展で「寂光」が特選となり、34年日展会員に推された。また40年と47年には日展審査員をつとめている。

この「寂光」は、氏が仏像を主たるモチーフにした代表作の一つであって、重厚な彩色と大きな構図の中に東大寺三月堂の不空罽索観音の偉容を仰いだ図である。

一方、「白杵の仏」は昭和46年改組第3回日展に出品された氏の最近作で、黄色を主調とした彩やかな色調、力強い筆触、重量感のあるマティエールが、大胆な構図の中に生かされて、石仏の量感を美事に捉えている。



白杵の仏
油彩
変形
80

博物館日誌

2月14日	池田知事、堀口捨己氏（茶室設計者）ほか 来館	2月27日	博物館協議会開催（応接室）
2月20日	常設展示「佐賀県の歴史と文化展」開場 昭和47年度定期監査	3月7日	NHK総合テレビ「話題の窓」で「白蛇山 岩陰遺跡第2次発掘調査」放映
2月23日	白蛇山岩陰遺跡第2次発掘調査 （3月5日まで）	3月10日	竹下八郎氏韓国のカササギ2羽の剥製寄贈
2月24日	第10回研究講座「佐賀の化石について」当 館中展示室で 講師 佐賀大学講師 西田民雄氏	3月25日	佐賀市文化財愛護少年団40名来観
		3月26日	鍋島直紹氏来館
		3月31日	三上次男氏、青山学院大学教授 佐久間重男氏来館
		4月11日	国立科学博物館人類研究室長鈴木尚氏、 同普及課権名仙卓氏来館

行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

企 画 展	会 期	会 場	備 考
野 鳥 展	48年 5月10日～6月5日	大展示室	常設展と併設（月曜休館）
佐賀県美術協会展 60周年記念	6月15日～6月24日	大・中展示室	常設展と併設（会期中無休）
郷土の先覚者書画展	7月14日～8月10日	大展示室	常設展と併設（月曜休館）
日 展	8月25日～9月23日	1・2・3号大・中展示室	会 期 中 無 休
理 科 作 品 展	9月29日～10月7日	大・中展示室	〃
九州沖繩現代工芸展	9月30日～10月7日	3号展示室	〃
装飾古墳壁画展	10月13日～11月4日	1・2・3号大展示室	〃
第23回佐賀県美術展	11月17日～11月24日	1・2・3号大・中展示室	〃
佐賀県高等学校美術展	11月29日～12月4日	大展示室	〃
近代文学資料展	49年 12月9日～1月15日	1・2・3号大展示室	月 曜 休 館
新遺跡出土資料展	1月20日～2月8日	大展示室	常設展と併設（月曜休館）
鍋島藩窯展	3月5日～3月24日	大展示室	〃

常 設 展

佐賀県の歴史と文化展	48年 4月1日～8月10日 49年 1月24日～3月31日	1・2・3号展示室 （月 曜 休 館）
------------	---	------------------------

（事務補佐員より）
同 係、技術職員（技師）吉岡喬二
（技術補佐員より）

○兼務
総務課庶務係、技術員（運転技術員）竹下仁三
（同係、事務員）

◎職員異動（4月1日付）

- 転入
学芸課資料係、事務職員（学芸員補）志佐輝彦
（蔵木小学校教諭より）
- 昇任
総務課庶務係、事務職員（主事）小柳武久

博物館報 第 14 号
発行年月日 昭和 48 年 5 月 1 日
編 集 古 賀 秀 男
発 行 佐賀市城内一丁目15～23
佐賀県立博物館
印 刷 佐賀印刷社